

山をくだった。

まことに「鬼熊」の名にそむかぬ豪の者かなと、感心されたが、前鬼の入口にお妙見の祠があり、牛でもかくしているような恰好の大杉にちなみ、前牛と呼ぶ。その山が前牛山である。

この部落はタッタ五軒。千年以来殖えもせず減りもせず、鬼熊、鬼上、鬼継、鬼助、鬼童の五鬼をもって名とし、みな鬼の字のついた姓を名乗る。もっともこれは通り名で、俗名は将監、主殿齋、求馬等々といい、すべて天下守護不入の連中で、昔から宗旨もなければ年貢も地頭もなく、ただ兩御門主の御支配という。こういう土地が日本にあらうとはさしも大旅行家の上人も今まで露知らず、さても世界は不知に満つるかな、と感心した。

宮は将監宅を御宿とされ、衆徒は求馬の邸へはいった。この坊は神山（深山のことか）から五十丁の谷底だが、人間の姿から住居具合までどこことなく由緒ありげで、まことに別乾坤である。久しぶりに鶏犬の声を聞き（これこそ武陵桃源郷の匂いがする）、トビやカラスのすがたも見た。さらにネコを目にしてはなはだ物珍しかった。

さて、求馬の家で、心経と称する雑炊[この二字目推とあり]を出し、また古例だといって藪くぐりという名の濁り酒をふるまってくれた。その酒を冷湯に浸け、このごろの雨も雲霧も一掃して戯歌二首をつくった。（中略）

さきの鬼熊将監の宅に、五木の各家から献上物が寄せられたが、その品々は、幅六寸長さ一尺二寸のヒノキの皮、俗に鬼沓という草鞋三足ずつ、イワタケ一箱ずつだった。ここの女たちはみんな鉢巻をしていた。

（注）

横井金谷は近江栗太の下笠（現在の草津市下笠町）の宗栄寺の生まれ。幼くして、親類の大阪・宗金寺に預けられたが、一か所に長く留まることなく、各地を気ままに放浪した。文化6（1809）年49歳の折、醍醐寺三宝院大峯入りを聞きつけて俄か山伏となり、同年6月、大峯入り行列にうまく入り込んだ。三宝院門跡高演法親王の一行である。その中で大越家職という高い官職と斧役を割り当てられて、24日出発。7月7日吉野蔵王権現、9日川上晴明滝、14日山上権現、その後龍泉寺等を経て26日釈迦岳、深山に達した。下北山の後には十津川村玉置神社、本宮、新宮、那智などを経て8月26日醍醐寺帰還した。将監五鬼熊の板駕籠（輿というべきか）など興味深い。求馬は五鬼助か、主殿齋は不明。金谷上人、没年はっきりしたことは不詳。宗栄寺には墓現存。

3 「奈良県の地名」（平凡社）

釈迦ヶ岳・大日岳の東南の傾斜地に開けた古い山伏村。標高約八〇〇メートル。釈迦ヶ岳に発した前鬼川が村東側を曲流して前鬼口で北山川に入る。大峰七十五靡二九番の宿。その裏行場が三重の滝である。

平安中期頃すでに開けていた村で、役行者に従った前鬼・後鬼の子孫と伝えられる五鬼熊（行者坊）・五鬼童（不動坊）・五鬼上（中之坊）・五鬼継（森本坊）・五鬼助（小仲坊）の五家がそれぞれ宿坊を営んで輿駟入峯の先達を勤めてきた。中世以来多くの修験者・僧俗の参籠地として栄えた深仙宿の食料補給基地でもあり、輿駟行者はこの山人集団にサポートされた。

「駿府政治録」に慶長一十九年（1614）十二月四日に吉野大峯五鬼のうち善鬼（名助）が大阪城にこもり、北山一揆にも前鬼の五鬼が主導的地位に立ったと記され、ここに定住した山人たちが地侍的性格を帯びていたことがわかる。いま小仲坊の行者堂梵鐘銘に「慶長十七年壬丑四月八日大峯行者堂 鬼介、鬼継、鬼熊、鬼童、鬼上」などとあり、北山一揆勃発二年前の鑄造である。

江戸時代の郷帳には前鬼の名は現れないが、「吉野郡名山図志」等に幕末の当地の生活が詳しく記録されている。